

鏡に映る向こう傷

ルジャンドルが高校生に語った講演をベースに、その内容を注釈し、より詳しく敷衍した補遺で構成される

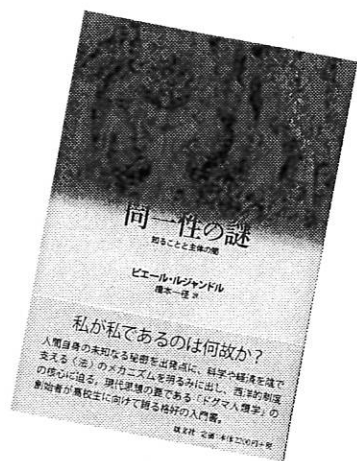
山城むつみ

ピエール・ルジャンドル 著
橋本一径 訳

▶同一性の謎

知ることと主体の間
5・10刊 四六判120頁 本体2200円
以文社

P・ルジャンドル著『同一性の謎』(以文社)を読む



ルジャンドルは難しい。だが、本書のベースは彼が高校生に語った講演である。もっとも、この講演の聴衆となったルイ・ル・グラン高校の準備学級はフランスの「エリート養成機関であるランド・セコールへの入学を準備する課程であり、高校といっても通うのは日本では言え

ば大学一、二年生に相当する年齢の者たち」ではある(訳者あとがき)。
講演そのものはこの邦訳でわずか三十数頁。本書は、この講演と、その内容を注釈し、より詳しく敷衍した六十頁強の補遺とで構成されている。講演のタイトルは「向こう傷」。話が始まるにつれて、このタイトルの意味するところは腑に落ちる。「辞書にあるように、向こう傷とは、鋭利な刃物で、特に顔面につけ

られた切りの傷のことです。要するにそれはひとつの刻印であり、身体につけられた一種のサインです。ですが自分自分の顔を見ることができず、鏡を使ったときだけに、これから私がみなさんに手渡すのは、一枚の鏡、考えるための鏡です」。

向こう傷は、それを刻印された我々のアイデンティティを保証するものだが、我々自身には見えない。しかし、ルジャンドルが差し出す鏡を覗き込みさえすれば、そこには、我々の素性を証す向こう傷がはっきりと映っている。たとえば、経済活動と運動してグローバルに拡張している「テクノサイエンス」は、西欧発祥ではあっても現在では洋の東西を問わず、あらゆる文明に「冷凍バック」で輸出されて「地球上のどこでも

利用できる」ようになっていく。我々の社会も例外ではない。だから、我々はこの「テクノサイエンス」の素性が、中世ヨーロッパで復興された古代ローマの市民法(ローマ法)にあるなどとは思ってもならない。しかし、本書はこの事実を鏡のようにつくつきと映し出すのだ。

ルジャンドルによれば、キリスト教は、一方において身体や経済などの形而下の諸活動を細目にわたって規定したユタヤ教の律法を捨象して純粋に精神的な儀式に(典型的には割礼を洗礼に刷新した。また、他方においては、捨てたユタヤの律法の代りにローマ法を採用して中世の「帝国」内の法的・経済的・政治的諸活動を規定し統治した。ルジャンドルは、法や政経の分野で将来エリートとして活躍する若者たちを前にこつした事象を茶目づつぶひに「キリスト教によるローマ法の株式公開買い付け(TOBB)」と呼ぶのだが、この新しい法が「帝国」において持っていた普遍的で実証的な妥当性が、近代科学における法(科学法則)の普遍性を用意したのだ。

ルジャンドルが「同一性」と呼ぶのは、「テクノサイエンス」の死角で生きていく「私」というもの(The Thing I Am)のことなのだ。たとえば、ルジャンドルは自殺者を法的に裁く言葉のうちにその痕跡を見出す。法は一人の自殺者のうちに「殺人者と被害者」という二人の人格が互いのように語ることがある。この奇怪な主体分割において思っている実存のことなのだ。「あらゆる人間にとって最初の、目には見えない向こう傷」は、端的には、そこですすんでいる。

このように、ルジャンドルが「同一性」と言うとき、この語は通常とはかなり違ったものを意味している。それは、ポストモダンニズムにおけるように、解体すべきものとしてではなく、保守すべきものとして考えられている。しかも、まさにこの同一性自体が「謎」を形成するのだ。たとえば、ルジャンドルは「母の息子である」と同時に夫であつた一人の男、しかも娘たちの父であると同時に兄であつたあの男、すなわちオディプスにさえ向こう傷を見出すだろう。だが、一人の息子の母であると同時にその父であるような主体には「同一性」を認めたくないようだ。オディプスのように系譜を縦方向に乱す主体には「同一性」を認めても、いわゆる性同一性を横断して系譜を横方向に攪乱する主体にはそれを認めたくないようなのはなぜなのか。ここが読みどころだろう。私には、私自身の額に刻印された「向こう傷」が私自身にも見えるようにルジャンドルが手渡してくれたこの驚くべき鏡を覗き込むときにそのことかえって見えなくなるものがあるように思える。

向こう傷は私自身には見えなくても、他者にはそれが見えていた。そして、私にはその他者が見えていたのだ。ところが、鏡を覗き込むとき、鏡は私とその他者とのあいだを遮断し、この他者を見えなくする。鏡の向こう側にはそういう他者が少なくともひとつはいる。向こう傷は、鏡ではなく、こつこつはみ出たシンギュラーな他者との関係において受け取り直そうと努めるべきものではないか。

(文芸評論家)

私が私であるのは何故か? 人間自身の未知なる知能を出現点に、科学や経済を境を越えてきたる(近)のテクニズムを踏まえに出し、西洋的制度の感心に従う、現代思想の礎である(社会学人)の動向が高校生に向けて語る体系的入門書。

つまり、我々はローマ法という歴史的蓄財の「利子生活者」なのだ。今日、万能のよこに振る舞う「近代的な科学母の息子である」と同時に夫であつた一人の男、しかも娘たちの父であると同時に兄であつたあの男、すなわちオディプスにさえ向こう傷を見出すだろう。だが、一人の息子の母であると同時にその父であるような主体には「同一性」を認めたくないようだ。オディプスのように系譜を縦方向に乱す主体には「同一性」を認めても、いわゆる性同一性を横断して系譜を横方向に攪乱する主体にはそれを認めたくないようなのはなぜなのか。ここが読みどころだろう。私には、私自身の額に刻印された「向こう傷」が私自身にも見えるようにルジャンドルが手渡してくれたこの驚くべき鏡を覗き込むときにそのことかえって見えなくなるものがあるように思える。

向こう傷は私自身には見えなくても、他者にはそれが見えていた。そして、私にはその他者が見えていたのだ。ところが、鏡を覗き込むとき、鏡は私とその他者とのあいだを遮断し、この他者を見えなくする。鏡の向こう側にはそういう他者が少なくともひとつはいる。向こう傷は、鏡ではなく、こつこつはみ出たシンギュラーな他者との関係において受け取り直そうと努めるべきものではないか。

(文芸評論家)